

1. 福永自身による言及など

* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、著者が意図したところを反映しているかどうかは不明です。

No.	タイトル	著者	書名(出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
0	「玩草亭百花譜」書誌	—	福永武彦 電子全集20 (小学館)	—	3	<p>・初刊版『玩草亭百花譜』(上) 1981年5月25日 中央公論社 6800円 日本写真印刷(株) 1975年・76年・77年Ⅰの草花写生帳、他に随筆「草花を描く」「再びの秋」「邯鄲」「きのこ」収録 縦225mm×横155mm・フランス装・厚紙装ケース・函・帯 「注」福永貞子、「図版目録」函題字・装画著者表紙陶印中川一政</p> <p>・初刊版『玩草亭百花譜』(中) 1981年6月25日 中央公論社 6800円 日本写真印刷(株) 1977年Ⅱ、78年Ⅰの草花写生帳、他に随筆「始める前」「絵の話」収録</p> <p>・初刊版『玩草亭百花譜』(下) 1981年7月25日 中央公論社 6800円 日本写真印刷(株) 1978年Ⅱ、79年の草花写生帳、他に風景・静物写生、御馳走帳を収録</p> <p>・中公文庫 上巻:1993年9月10日 中巻:1993年10月10日 下巻:1993年11月10日</p>
1	草花を描く	福永武彦	『MARC-flash』 (メジカルビュー社)1979年3月 『玩草亭百花譜』(上)収録	1979/3	5	<p>(引用)</p> <p>下手の横好き、絵を描くことは昔から好きだったが、結核が癒つてサナトリウムを出る時に、或る女友達が饒別にルフランの油絵具を一揃ひ贈ってくれた。(中略) 始めてみるとこの油絵といふのは面白すぎて、文字通り寝食を忘れるありさま、とても身が持たないと分つてルフランの絵具が盡きると共に中止し、今度は水彩絵具に轉向した。この方はくたびれればすぐにやめられるから、曲りなりにも續いてゐる。(中略)</p> <p>それとは別に四、五年前から植物学にも少々凝り始めた。何も植物学といふほどのこともないので、追分て山暮しをしてゐればいつでもとどりの草花に取り囲まれてゐる。その名前が分らないのは口惜しいから、図鑑の類を蒐集して実物と首つ引きで調べるといふだけのことである。</p> <p>しかしせつかく図鑑で名前を探り当てても、書きとめておかなければかく忘れ易い。とすれば名前と同時にその実物の寫生をしてあげば、自分のための小図鑑がおのづから出来上るといふことにならう。といふので、故障が起らない限り、毎年、七月から九月までの間、折にふれて草花の寫生をするやうになつた。但し故障の方は必ず起つて、去年などは夏ちゆう寝てゐた位だから、初夏から初秋まで、通しての記録といふわけにはいかない。</p> <p>孤独な愉しみであつた筈のものが、どうも不純な分子がまじつて来たらしく、或る出版社の編集者が画集にして出させようと言つてくれた時は、不意に自分が文士ではなく画家であるやうな錯覚を覚えた。もつともこの方面では、私の敬愛する詩人木下圭太郎に「百花譜」といふ傑作があつて、木下圭太郎すなはち医学博士太田正雄は、昭和十八年の春から日課として草花の寫生を試み、昭和二十年の夏に至つた。没したのは同年十月である。戦時下に描きためられたこの「百花譜」は、その数八百七十枚に及んでゐて壯観の極みである。この春、岩波書店から刊行される予定だが、私はその校正刷を見て意氣とみに沮喪したことを告白する。趣味もこれ程の域に達すれば、本業に劣ることがないといふ気がして脱帽敬礼するのである。(1979年3月)</p>
3	木下圭太郎「百花譜」刊行記念に寄せた文章	福永武彦	木下圭太郎「百花譜」刊行記念展覧会(1979年3月)会場入口近くのパネル 『玩草亭百花譜』(下)あとがき(福永貞子)	1979/3		<p>(引用)</p> <p>達意の文字による短い心覚えを伴つたこれらの写生帖を、一枚また一枚と見て行くと、私たちは彼がひそかにその命の焔の長くは燃え続きさうにないことを知つて、最後の夢をここに托して情熱の一切を傾けたのではなかつたのかと、つい想像したくなるのである。</p>

2. 単行本その他

No.	タイトル	著者	書名(出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
1	「玩草亭百花譜」あとがき	福永貞子	『玩草亭百花譜』(下)	1981/4	6	(引用) 武彦が、野草に心惹かれその花を賞で、丹念にスケッチし始めたのは、「信濃追分風物写生帖一主として草花」と題する第一冊からで、その最初の日付によると、一九七五年の八月六日である。その年の初夏、私の旧友佐藤正次夫妻が追分の小舎に訪ねてこられ、小さな可愛いノートと色鉛筆をお土産に下さった。縦十一センチ、横八・五センチの、掌に馴染みやすく、文房具の好きだった武彦の好みにぴったりの品だった。友人夫妻が帰ったあと、それを手にして眺めていた武彦は、「しばらく絵を描かなかったけど、また自画自讃とゆけかな」と、絵心をそそられたのか、楽しそうに話しかけてきた。やがてこの小ノートは、武彦の手で新たに好みの柄のコットン紙をつかって表紙貼りされ、可憐で小さな画帖となって、草花スケッチ帖誕生のきっかけとなった。(中略) 1945年以降のほとんどの歳月を、病気との同居生活を強いられてきた武彦は、文学に注ぐべき体力の余りの少なさに、時には苛立ちを覚えるような日々を送らねばならなかった。しかしこの時以来、絵筆の中に憩うことで、ようやく安らぎを取り戻したように私には思えた。 こうして、絵日記ともいべき草花のスケッチは始められた。はじめのうちこそ、草花の一般名と、どこどこで採取したというようなコメントが記されるだけだったが、翌七六年の夏ごろからは、草花の名を図鑑と首っぴきで調べ、学名を記入することになり、時間を割くようになった。牧野富太郎博士ほか各種の植物図鑑を揃えて、サア、なんでもこい、と胸を張っていたのもこの頃である。さらに七七年に入ると折りにふれての感懐なども記入しはじめる。このようにして、草花写生帖が十六冊、草花同定帖が三冊、葉書大の用紙に描かれたもの二十二葉が遺されることとなった。
2	福永さんの思い出	田中淑恵	水絵の具の村 信濃追分旅のモザイク(新書館)	1981	10	(引用) 私が前日(1975.7.31)、照月湖のほとりで描いてきたホタルブクロや豆の花のスケッチを熱心にご覧になった。それから二ヶ月後くらいに届いた白樺の絵葉書に、緑のインクで、 僕は夏の間毎日草花の写生をして愉しみました 黒いペンの下書に日本絵具で色をつけたものです 来年はもつとせつせと描くつもりです とあるので、のちに『内的獨白』や『夢百首雑百首』など御自身の本を飾られた草花のスケッチは、或いはその日のことが契機になったのかもしれない。 一年ほどして、小型のスケッチ帖に淡彩を施した草花の絵を見せていただいたが、どの頁にもきちんと花の名前が書かれていて、どの花も皆確実に生きていた。愛を注いで植物を見つめ、筆をとって紙に写す眼の確かさ、それはそのまま創作に対する時の厳しい姿勢と変わるところがなかった。
3	福永武彦研究会特別例会講演(2017年11月26日)「信濃追分“玩草亭”と福永武彦からの五通の絵はがき」	田中淑恵	福永武彦研究 第15号	2020	60	(引用) 秋に頂いたはがきに、「僕はあれからせつせと草花の絵を描きました」って書いてあるんですね。その次の年に伺うと、スケッチブックを2、3冊、「君に見せるの恥ずかしいけど」って言って、見せてくださったんです。 これが第1作、初めてお会いしたのが1975年の8月1日、これが8月6日なんですね。「僕も描こうかな」と言ったら、すぐに描きはじめられたんですね。この「野あざみ」を。 何冊か見せていただくと、だんだんうまくなるんですよ。最初、線が硬かったのに、だんだんしなやかになってきて、黒いペンで輪郭を描いて、水彩で彩色してあります。
4	証言 病床の福永武彦を診察して(下)(2009年7月25日の聞き取り)	小井土昭二 1978年から死去まで追分での福永の主治医	年報 福永武彦の世界 第2号	2011	4	(引用) — 何か文学的な話とか、こんなものを書きたいとか、そういう話はありましたか。 そういう話はなかったですね。自分がこれから先もう書けなくなれば絵、絵も描けなくなれば音楽、そういう段取りで自分の締めくりをしたいと『玩草亭百花譜』のことは話していましたけど。